

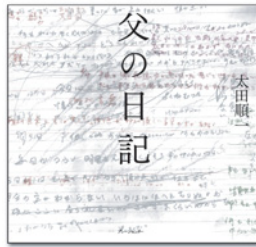
父の日記

伊奈信男賞受賞作品

受賞作品を織り込み、清廉なる写真家「太田順一」が静かに問う！

古い。その生命の痕跡、その本質。

人間存在の「有限性」と「唯一性」を肯定するため、
生命の痕跡にシャッターを切る。*伊奈信男賞受賞理由より引用。



版型/頁…タテ198×ヨコ210 並製117頁
写真全88枚 造本=鈴木一誌
税込価格…2520円

【収録作品】
「父の日記」写真46点
「ひがた記」写真42点

消失と生成の運動としての痕跡、干潟と父の日記を重ね合わせるようにして編まれた写真集。書かれたものを撮る。太田順一が昨年開いた写真展「父の日記」は、ひとことというなら、いつけん退屈なその行為に貫かれた作品だった。

今回写真集として出版された『父の日記』では、人口の干潟を撮った写真「ひがた記」が併せて編まれている。父親によって書かれた文字を撮ったモノクロームの「父の日記」と、変化に富むカラーの「ひがた記」。これらは対照的にも思えるが、そうではない。太田は次のようにいっている。

「干潟で私がこころひかれたのは、棲息している生き物の姿それ自体よりむしろ痕跡のようなもの、例えば小さな貝が這い回った跡や鳥が飛び立ったあとに残した糞、それに波や風の力でつくられた泥砂の文様である。それらは潮が満ちてくると、たちまち消失する。あつけないものである。しかし次に潮が引くと、顔を出した地面には必ずまた別の新たな痕跡がしるされるのだ。この太古の昔から繰



大阪湾の環境再生実験のため、岸和田の沖合いにつくられた人工の干潟。小学校の運動場くらいの大きさの干潟に、2005年の夏から1年あまり通い、四季のうつろいのなかで撮影をした。陸と海との境界ボーダーである干潟では、潮の満ち引きによって、地面が水没と干し上がりを繰り返す。消えては現れる儚かな命の痕跡——2年後、父が死んだ

り返される自然のいとなみに、私は命のはかなくも、しかし脈々とした確かな連なりを見る思いがするのだった」

消失と生成の運動としての痕跡。これはまた、「偏執的に同じ文言、記述が繰り返され」ていったという「父の日記」にも共通することである。人は何かを残すために、書き記すのだろうか。そうではなく、書くこともまた、消失と生成の絶え間ない運動なのではないだろうか。

書かれたもの「痕跡」を撮る、という太田の行為は、同時に、写真に定着されるのはつねに痕跡である、という本質を照らし出す。写真に現実が痕跡として定着されるのではない。そうではなく、痕跡のみを定着できるということこそが、写真の現実性なのである。

「父の日記」と「ひがた記」の対位法によって浮かび上がる、書かれたもの「痕跡」運動というエクリチュールとしての写真は、写真「いまこ」現実「痕跡」物質という、巷にあふれる生ぬるいファンタジーを揺るがすものでもあるだろう。

反復「運動」のエクリチュールとしての「父の日記」は、呼吸のように単調な写真集だ。だがそれゆえに、生きることのように躍動している写真集でもある。（日本カメラ・評：上野修）



●太田順一（おおた・じゅんいち）

1950年奈良県生まれ。早稲田大学政治経済学部中退。大阪写真専門学校（現・ビジュアルアーツ専門学校 大阪）卒業。写真の会賞、日本写真協会賞作家賞受賞。写真集に『女たちの猪飼野』（晶文社）、「日記・藍」（長征社）、「大阪ウチナンチュ」（プレーンセンター）、「ハンセン病療養所 百年の居場所」（解放出版社）、「化外の花」「群集のまち」（以上プレーンセンター）などがあり、著書に「はくは写真家になる！」（岩波書店）がある。



群集のまち
ひとが一人もいない大都會
大阪24区の今

太田順一 主な写真集